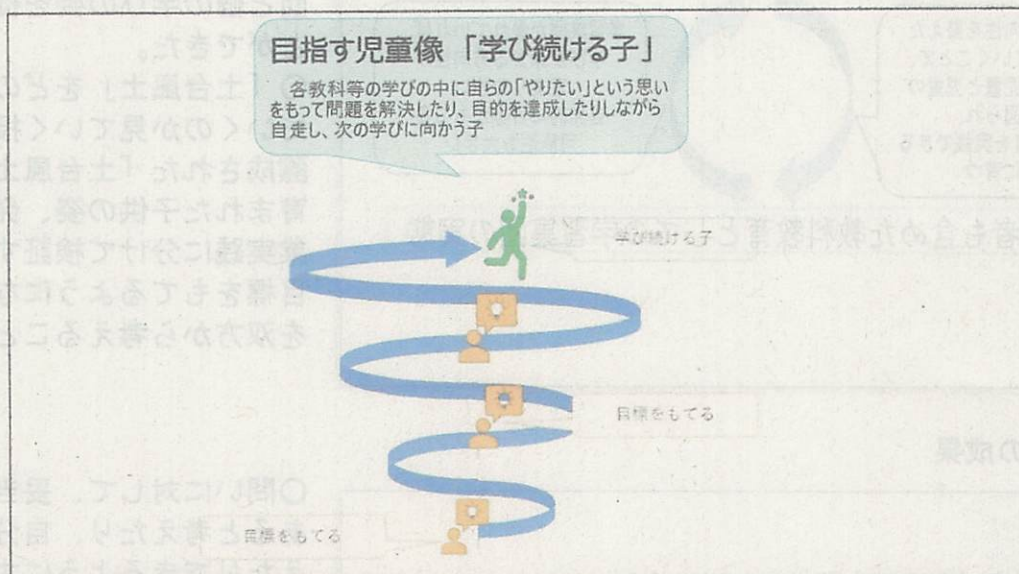


学校研究概要説明補助資料

これまでの学校研究を進める中で、児童一人一人を大切にしている日々の授業の在り方を見つめ直し「児童の側（がわ）」に立って、研究を進めていくことが大切ではないかという認識が生まれた。

日々の授業を大切に、児童、教職員が少しずつ前に進もうとする、この様相を「漸進する学び」とし、研究主題として掲げている。



「学び続ける子」とは、自らの「やりたい」という思いをもって問題を解決したり、目的を達成したりしながら自走し、次の学びに向かう子である。

「学び続ける子」になるためには、自らの目標をもてるようになることが大切であると考え、研究の視点を「目標をもてるようになること」と定め、日々の授業を見つめ直していくことにした。



授業づくりに大切な要素として「土台・風土」「教材」「教師の関わり」と整理され、実践を通して研究を進めてきた。

→研究1年次には、子供が目標をもてるような授業には、どのような要因があるのかを授業を基に全教職員で対話を重ねて整理していった。

→子供が目標をもてるようになる授業には「土台・風土」「教材」「教師の関わり」の要因があるのではないか、と整理されてきた。そこで、この三つの要因を、授業づくりに大切な要素として設定し、要素ごとに部会に分かれ、実践を通して研究を進めることにした。

「土台・風土」部会の成果

土台・風土

① 学びが深まる方向性、道筋のイメージ

学びが深まる方向性を整えた授業を繰り返していくことで、授業者と児童、児童と児童の相互理解が図られ、よりよい教科教育を実践できる学習集団に育つ



学習集団が優れていれば、学びが深まる方向性が定まりやすい
自発的に目標をもてる可能性も大きい

② 授業者も含めた教科教育としての学習集団の実態

○目標をもつための「土台風土」を、①学びが深まる方向性、道筋のイメージ②授業者も含めた教科教育としての学習集団の実態と考え、それぞれ観点を設定して、集団と個の学びの姿を捉えていくことができた。

○「土台風土」をどのように育んでいくのか見ていく授業実践と、醸成された「土台風土」によって育まれた子供の姿、発揮された授業実践に分けて検証することで、目標をもてるようになる学級の姿を双方から考えることができた。

「教材」部会の成果

教材



○問いに対して、妥当性や価値があると考えたり、自分事として捉えたりできるようにすることで、問題を見いだすことができるようになった。

○「教材」という視点から問題を見いだすことができた子供の姿、発揮された授業について検証を図ることで、素材の提示による問いのもち方には、環境も影響すること、教師のアプローチも重要な役割を果たしているということが明らかになった。

「教師の関わり」部会の成果

教師の関わり

「学びの事実を認知する関わり」
→ 子どもの姿を捉え、伝え、支える

- ① 教師が子供と共に拠り所を生み出す時間を設定する
- ② 教師が子供と共に拠り所を基に学びを捉え直す

「自ら学ぶ意欲を持ち続けられる関わり」
→ 心理的欲求に働きかける

- | | |
|--------------|--------------------------|
| ① 内発的な学習意欲 | 興味・関心をもち学習したいという意欲 |
| ② 達成への学習意欲 | 目標を定め、達成のために努力していかうとする意欲 |
| ③ 向社会的な学習意欲 | 所属している集団、社会に貢献したいという意欲 |
| ④ 自己実現への学習意欲 | 将来や人生の目標を達成していかうとする意欲 |

○子どもが学びの事実を認知することができるように、教師が児童と共に、拠り所を生み出し、それを基に学びを捉え直すことで、児童が達成度や成果を感じることで、学ぶ価値を感じることもできた。

○自ら学ぶ意欲をもち続けることができるように、児童の心理的欲求に働きかけることが大切であることが分かり、教師が児童の心理的欲求を刺激していくことで、目標をもち続けようとする児童の姿を捉えることができた。

※詳細は研究紀要を御覧ください。